
AC fA 名も無き物語《ネームレス・エピソード》

T r agweite

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AC f A ネームレス・エピソード 名も無き物語

【Nコード】

N0340R

【作者名】

Tragweite

【あらすじ】

少女は全てを失った。しかし、少女にはひとつだけ手に入れたものがあつた。

少女は世界を憎み、復讐を誓う。そのための剣を彼女は手に入れた。やがて少女の目標は、誰かの目標とすり変わり、行き場を失う。

少女の本当の願いとは何なのか――

Act 00 プロローグ

Act 0a 名もなき物語 ネームレス・エピソード

Act 000 プロローグ

そこは白く染まった世界。吹き荒れる風も大地も空も全て白一色だ。およそ、生命体が済むには最も適さないであろうその場所に、けたたましく響き渡る音があった。吹き付ける吹雪と風の音を碎くように響かせ、荒れ狂う大気を引きちぎって、大型の多目的輸送機は2つのエンジンを吹かしながら、荒れ狂う気流に負けることなく白い世界を進んでいく。

「外気温マイナス41度、風速40メートル強」

がたがたと揺れる機内の中で、冷たい漆黒の瞳をぼんやりとモニターに向けながら彼はおもむろに読み上げた。

「機体チェック、各部オールグリーン。機体とのシンクロも問題ありません」

めまぐるしく表示されていく情報の羅列を瞬時に理解して指先のキーパットを叩いていく。視界いっぱいにはこれから彼が行う任務の詳細が記されている。その詳細に目を通しつつ、必要なモノだけを頭の中へと放り込んでいく。彼にとって必要なのは任務の目標と、敵性戦力の詳細だ。

彼の居るそこはとても狭く、一種の棺桶のような場所だった。

この世界における主力の兵器にして王者とも言える存在——アーマード・コアとよばれる機動兵器のコックピットだ。全身を金属の骨格に固定され、頭部にはHUDと呼ばれるボックス型の装置を被り、首の部分には、首輪と呼ばれるリンク装置によって機体と繋がっている。その姿はさながら棺桶の死体と言ったところだ。

『降下地点まで、あと4分です』

耳朶を打ったのは馴染み深いオペレーターの声。その澄んだ声音は、聞かたびにいつも彼の心を静めてくれる。そんな不思議な温かみがあった。

「ティア、作戦プランに変更は？」

彼はどこまでも落ち着いていた。平時となんら変わらぬ声音で、ひよつとすると平時よりも落ち着いているような低い声だった。

『予定通り、対空警戒網の外より降下による侵入。そのままポイントAへと向かい移動、警戒に当たる敵性戦力は即応部隊が二個小隊、ポイントA到達後コンテナにて武装を受け取り、ポイントBへ。ポイントBまでに予想される敵性戦力はMT部隊が一個中隊と予想されます。』

B地点にて最終補給を行った後、作戦ポイントへと移動し、基地の機能を完全に停止させます。使用する武装は「LBW WAGM 320L」使用後は直ちにポイントDを経由し回収地点であるポイントEへ向かってください。この際には基地内の残存戦力全てを相手にすることになります、また本作戦は持続的に敵の攻勢にさらされることが予想されるため、作戦時間は出来る限り最小に留めてください」

ティアのブリーフィングを聞きながら彼は基地の戦術マップを眺めていた。そこには各ポイントの位置や大まかな敵の配置などが記されている。その情報とティアの作戦とを繋げ、脳内でイメージを組み上げていく。そしてそれを、脳内でシミュレートしながら、最適な行動を描きあげていく。

『到着しました』

その言葉が告げられる頃には既に、彼の脳裏に明確なイメージが出来上がっていた。あとはそれを出来る限り正確に行うだけだ。

彼にとって戦場とは舞台であり、一種の劇なのだ。

あらかじめ決められたストーリーに従い、ただ自分という役を演じきる。台詞など存在しない戦争という悲劇。

彼にとって戦場とはそれ以上でもそれ以下でもない。

「了解」

静かに言葉を吐いて、彼は指先でキーパットを叩いた。

人を模した機動兵器、先鋭的なスマートなシルエツト。鋼色の腕と脚を持つそれはA Cアーマード・コアと呼ばれる人類の生み出した最高の機動兵器だ。

その中であつて、ノーマルと呼ばれるタイプをベースに最新技術を惜しみなく投入した次世代型A Cアーマード・コア。コジマ技術、アレゴリーマニピュレイトシステム（AMS）など多くの先端技術を使用し、ノーマルとは比較にならない戦闘能力を持つそれは、ネクストと呼ばれる。

その性能を、あえて前時代的なたとえ方をするならば、まさに一騎当千といったところだ。

頭部に双つの光が灯った。それは人間で言う眼に当たる部分。碧色の眼が輝きを得たと同時に、機体の前方の空間がぱつくりと口を開けた。開いた口から覗く外の光景はやはり白。気圧の変化に、機内から空気が逆流して音を生んだ。それは、さながら映画やおとぎ話に出てくる悪魔の唸り声のようである。

『効果地点に到達、連結を解除します』

がくん、と機体が揺れ、次の瞬間には落ちる感覚が彼を襲った。

モニターの片隅にある高度計が示す数値が見る見る下がっていく。吹きすさぶ風が機体を殴りつける。けたたましく鳴り立てる警報アラートが鬱陶しい。

降下を始めて七秒という時間が過ぎたところで、分厚い雲の層を突き破った。

瞬間、景色が一変し、鳴り響いていたアラートも沈黙する。激しい揺れは何処かに消え、静かに風を切る音だけが、聴覚を刺激する。ありえないことであるが、彼は風を肌で感じていた。機体とリンクしているとはいえ感覚までは共有しない。だが、確かに今、彼は大空を降下しているような感覚の中にあつた。

モニター越しに覗く景色は、満天の星に包まれた夜天と白銀の大

地だった。夜空にちりばめられたそれはまるで光の川となつて、きらきらと輝きを放っている。そして、眼下には月明かりに淡く照らし出された白銀の世界が広がっている。星と同様に光を弾き煌めくそれは自然が生んだ宝石とでもいったところだろうか。

美しい。その言葉では表現しきれないほど、この場所は美しかった。

だが彼は感嘆の声も、沸きあがる興奮もなく、ただ指先のキーパットを叩き、いくつかの項目を操作する。

『システム、戦闘モード起動します』

無機質なシステム音声が、狭いコックピットに響き、徐々に高まっていくジェネレーターの駆動音が耳朶を打つ。

『前方、距離10000に機影を確認、数12』

システム音声が報じ、モニターに判別された機種が映し出された。なんということはない一般的な攻撃ヘリだ。30ミリガトリング砲や空対地ミサイル、対地ロケットといった武装はネクストにとってそれほどの脅威ではない。だが、空を自由に動き回る存在はやはり邪魔以外の何者でもない。

それにしても、基地から比較的離れているというのに、ここで彼に見つかってしまったのは不幸な偶然というほか無い。

脳から送られた電気信号は骨髄を経由して全身へと送られる。AMSと呼ばれるこのシステムは首輪という装置によって、骨髄と機体とを繋いでいる——厳密には骨髄に埋め込んだ小型の発信機とを繋いでいる——彼の脳が下した命令は首輪を経由して、機体へと伝えられるという仕組みだ。

なるほど、繋がれし者とはよく言ったものだ。^{リンクス}

つまり、自分の身体を動かすのと同じ要領で機体を操縦できるということだ。

理論として説明する分には簡単だが、実際にやってみればその過酷さがわかることだろう。

例えるなら自分の頭がコンピューターにでもなったようなものだ。

複数の情報を一度に処理し、個人という概念さえあやふやなモノになるということだ。

そのためネクストに搭乗できる人間は限られていた。

対G耐性はもちろんのこと、機体とリンクしている間にかかる脳への負担が極めて大きいため、それを行える先天的な才覚を持つていなければならぬ。そして、脳をコンピューターの代わりに出来る者がそう多いはずもない。リンクスが極めて少ない理由のひとつだ。

彼は視覚を目標へと向けた。

高度に自動化されたFCS《火器管制システム》はパイロットの視覚とリンクされている。そのため目標を見るだけでコンピューターがロックオンを行ってくれる。それに留まらず、目標との距離や目標の種類に合せてFCSが使用する火器を最適化するのだ。パイロットの仕事は引き鉄を引くだけだ。

腕部より後ろ側にあるハードポイント、その右側に装備されたAAM《空対空ミサイル》の射出口が開いていく。その数は12。その12個の口の中には各2発ずつのAAMが装填されている。

手元にあるスティック状のそれは武装の引き鉄トリガーの役割を果たす。ターゲットマーカーが赤く明滅するのを確認して、彼は引き鉄トリガーを引いた。指先の、親指の部分にあるトリガーを押した。そこには躊躇も慈悲も一切なく、ただ当たり前前の事として彼はそうした。

12個の発射口から次々に吐き出されるミサイル。総勢24発のそれは、すぐさまロケットモーターを点火させ澄み切った夜空に炎の尾を引きながら、目標へと向かい広がりがりながら超高速で遠ざかっていく。全てを吐き出したそれを、彼は投棄バージした。

彼らにとってそれは予想外の攻撃だった。

気づき、散開する。だが手遅れだ。けなげにもフレアを撒く機体もあったが、全てにおいて遅すぎた。各2発ずつのミサイルが襲い掛かり、夜空に12個の火球が生まれた。

だが彼に喜びや、感激といった感覚は一切生まれてこなかった。

奇襲と呼べるのはここまでだ。異常を察知した即応部隊が直ぐにでもやってくることだろう。それ以前に、熱烈な対空砲火による歓迎が待っている。

とはいえ、この場所は比較的距離があるため命中精度など知れたものだ。

先ほどの攻撃は始まりを知らせる合図の代わりとなった。

僅かな間を置いて、予想通りの対空砲による無差別な弾幕が展開される。

「……」

鳴り響くアラート。モニターに投影された情報はミサイルの接近を知らせていた。熱センサーを内蔵したミサイルは独自に獲物を見つけ襲い掛かるようにプログラムされている。夜空に浮かぶ熱源などそう多くは無い。せいぜい鳥か、敵かの二択だ。

そして、それを見分けられないほどミサイルもバカではない。

それはさながら、点ではなく面といった形で彼へと迫っていた。数を数えようとするのがバカらしくなるほどのミサイルの集団が高速で近づいてくる。

しかし、彼に焦りの色はなかった。手元のスティックを操作。ス
イツチを叩き、両肩

エクステンション
脇の肩部武装を作動させた。

ぱつと火の玉が打ち上がり、夜空を彩る。さながら旧世紀に存在した花火と呼ばれるものに良く似ていた。

高熱に彩られた上空はミサイルにとって、これほど混乱するものもないだろう。

およそ3分の2に当たるミサイルは、その熱源に引き寄せられ彼から遠ざかっていく。

だがそれは残りの3分の1は欺瞞に騙されずに彼へと殺到しているということでもある。

数が数なだけに、3分の1とはいえ決して少なくはない量だ。

彼は使い終わったそれを切り離し、両腕を僅かに上げるように命

じる。

それに呼応するように機体の腕も動きを見せた。両腕には二対のマシンガンが装備されている。その銃口が真っ直ぐに前へと向けられた。次の瞬間、銃口が閃光を立て続けに生み、高速の弾丸を吐き出していく、反動による誤差など気にすることもなく、彼はトリガーを引き続けた。連射速度は毎分800発。それが両腕にあるため毎分1600発の弾丸が吐き出されていることになる。FCSがミサイルを追尾、最も脅威なものから自動的にロックしていく。濃紺の夜天を朱に染めて彼は撃ち続けた。

一発に命中し、回転を伴ってばらばらになっていく。もう一発が遠くで炸裂。巻き込まれた数発が続けて誘爆し、さらに一発が弾丸を喰らって爆発した。

迎撃はここまでだ。残りは避けるか防ぐしかない。

距離2000……距離1500……。

距離は見る見るうちに縮まっていく。だが、彼は動かない。

距離1000……距離500……。

ずっと鳴り響くアラートを、どこか遠いところの出来事のように感じながら彼は降下を続けた。

そして、距離300……距離100……。

距離0。ミサイルが眼前に迫ったところで、彼は動いた。

その動きは異常とも言えた。先ほどまでそこにいた機体が、一瞬のうちにズレたのだ。まるで瞬間移動でもしたかのような動き。

殺到したミサイルが搭載された近接信管が作動し炸裂する。爆発が空をオレンジ色に染め上げ、爆炎と破片が周囲を襲う。だが既に彼の機体はその範囲から逃れた後だ。

クイックブースト。

ネクストタイプだからこそ可能な瞬間機動。コジマ技術によって可能となった桁外れのエネルギーを爆発にも似た出力でブースターへと送り込み、瞬間的に絶大な加速を得て機体を前後左右へと高速移動させるというものだ。

反面、パイロットへの負荷などは考慮されておらず、如何に最新鋭の対Gシステムがあるとはいえ、相殺できるものでもない。

わずかばかり遠のいた意識を引つ張り上げ、彼は次の事へと思考を巡らせた。

ミサイルを処理しても安心など出来るはずもない、ぼやぼやしていれば第2波にさらされることになる。

彼は自由落下を止め、ブースターを吹かした。

背中を押されたように加速していく機体。対空砲による弾幕をかいくぐり、彼は降下した。

氷に覆われた大地が月明かりを反射して蒼く輝いていた。

上下反転。

彼は空中で機体を回転させ上下を入れ替えた。ブースターの向きを垂直に変えて最大噴射して落下速度を殺す。

蒼い大地を踏み砕きながら、彼は降り立った。

マップを確認して現在位置を特定する。基地から南東に50キロの地点。ポイントAは北西に7キロといったところか。

「降下成功、これよりポイントAに向かう」

『了解。気をつけて』

ティアの応答を聞きながら彼は機体を滑らせた。

まるで昼間のように明るく照らし出されたその場所は、混乱の只中であつた。

「敵襲だ！」

「即応部隊にスクランブルを要請しろ！」

「対空砲急げ！」

各部隊の隊長たちが奇襲への対応に忙殺されている。

「ミサイル部隊は！何をやっている！」

男の怒鳴り声を合図にしたように大量のミサイルが空へと打ち上げられた。

行き交う兵士たちの表情は一樣に困惑と焦りが張り付きこわばっ

ていた。

そこはトーラスの保有する軍事施設だ。一応、基地としての戦力も保有しているがあくまで新型コジマプラントの実験場だ。職員のおおくは研究者であり、その警護という形で軍が駐留している。存在を秘匿されたこの場所が、まさか戦場になるとは思ってもみなかったことだろう。そうしたことあつて、対応は後手後手だった。

敵襲を受けて十分近くが経ったところ、ようやく即応部隊が出撃の時を迎えていた。もし、敵が直接ここへ降下していたのなら、既に決着はついていることだろう。

兵士たちの応援とも罵声ともいえない言葉に見送られ、ノーマルとMTの混成部隊は基地を後にした。

「各機、敵の正体は不明だ。油断するな」

「了解」

ノーマル6機とMT8機の混成部隊は白い大地を進んでいく。

「MT部隊は1キロ以上の間隔を持って追従しろ」

部下に命じ、入念に周囲を探查しながら進んでいく。彼の乗る機

アイマード・コア

体はノーマルと呼ばれる一般的なACで、重厚なフォルムに、不似合いなほど小さい頭部。左腕には大型の盾を持ち、右腕には各々火器を握っている。かつては世界を席卷したノーマルであつたが、今のネクストタイプの投入とAFと呼ばれる超大型機動要塞への移行もあつてその数を大きく減りこしたものの、その汎用性の高さや量産性など、ネクストとは違い代替可能な面から、未だに主力の座を完全に明け渡したわけでない。

その後方、MTと呼ばれる機体が8機V字陣形を組んで歩いていた。

鳥類を思わせる細い脚部に腕の無いボディを持ったそのシルエット。マッスル・トレーサー、通称、MTは全ての機動兵器の祖となる存在だった。もともとは作業用の機械であつたものを兵器に転用したことが全ての始まりだった。そこからノーマルと呼ばれるAC

アイマード・コア

が生まれ、今ネクストと呼ばれる次世代機へと受け継がれようとし

ている。性能こそノーマルにさえ遠く及ばないものの、量産性や扱いやすさなどから今も数多く使われ続けている。

通信機から仲間の息遣いさえ聞こえそうなほどの静寂に包まれながら、14機の部隊はゆつくりと前進を続けていた。

そして彼らは出会った。

「撃てっ！」

間髪入れず隊長が叫び、トリガーを引いた。状況からしてみればその判断は間違っただけではなかった。味方であればIFF《敵味方識別装置》によって判別は容易であるし、第一にこの場にいる味方は全て把握されている。つまりそれ以外は敵という認識に間違いはない。

しかし、最も正しい選択肢を挙げるならば、彼らは逃げるべきだった。

『プライマルアーマー展開』

システム音声が告げ、周囲の空間がほんの一瞬揺らいだ。

刹那、無数の弾丸が機体を襲った。

1つの弾倉^{マガジン}を撃ち尽くして、彼らは息をついた。

「やったか……」

仲間の誰かが呟いた。

その言葉を聞きながら、彼らは一様に新しい弾倉を装填する。

舞い散った氷と雪と大地の一部が作り出した霧によって、その姿をうかがい知ることが出来ずにいた。かといって、動くことも出来ず、彼らはじっと結果を待った。

「——ッ!？」

その場にいた誰もが瞬時に状況を理解できなかった。友軍機が真つ二つになる光景を、ただ漠然と見せ付けられている。まるで遠い世界の出来事のように皆感じていた。

モニター越しに碧色の目と視線があった。

「……！」

その時何かを叫んだつもりだったが、一体何を叫んだのかさえ理解出来ていなかった。

しかし、訓練によって叩き込まれていた行動を身体が反射的に実行していた。

右腕のマシンガンフルオートで発射。閃光が瞬き、火線が闇夜を引き裂いた。

「バカなっ！？」

今度ははつきりとした言葉になった。

確かに今、弾丸は敵機を捉えていた。しかし、敵機の眼前で弾丸が何か、見えない壁にでもぶつかったように弾かれたのだ。目を凝らせば敵機の周囲が僅かに揺らいでいる。

プライマルアーマー……。

その単語が脳裏に浮かんだ瞬間、彼の機体は上半身と下半身とを切断されていた。

プライマルアーマーは機体周辺にコジマ粒子を濃縮し停滞させる事で一種のバリアとするものだ。比較的威力の低い火器程度ならば無力化することが可能であるが、貫通性の高い火器やレーザーといった武装に対しては効果が薄いという弱点もある。

眼前のノーマルが構えたマシンガンを撃ち続けている。

その程度では機体に傷1つつけることは出来ないというのに。

彼は左腕を振った。

その動作はまるで邪魔なものを軽くどかさうなものであった。だが連動したFCSが最適な武装を自動で選択。弾薬の尽きたマシンガンを捨て、手ぶらとなっていた腕部から光刃が迸る。単なる腕の振りは、灼熱の刃となって眼前のノーマルを容易く両断する。重力に従って、それが地に落ちていくのを見届けて、彼は次なるノーマルへと視線を動かした。呼応して機体に向きを変え、頭部が彼の望むものをモニターへと投影する。

残る敵の数は12機だ。内訳はノーマルが4とMTが8。

二機も落とされたことで、ようやく状況を理解したのか、ありったけの火力を以って必死の反撃を試みている。だが、その全てを以ってしてもネクストの持つプライマルアーマーを貫通することなど出来はしなかった。

クイックブースト。

一瞬で間合いを詰められ、一瞬たじろぐノーマルに一閃を加え、クイックブーストを吹かして離脱。同時にその一回の動作で次の敵機へと間合いを詰め、さらに一機を葬った。

さらに激しさを増す攻撃の間をすり抜けて、彼は次々に敵を切り裂いていく。

やがて、最後の一機が健気にも弾の切れたマシンガンを棄てて迫ってくるのを、無慈悲に切り裂いて戦闘は終了した。

時間にして僅か数分の内の出来事だ。

「敵を殲滅。予定通りポイントAへの移動を続ける」

ティアと繋がる通信機へと報じて、再び彼は機体を滑らせた。数分の沈黙。音といえば機体の駆動音と振動くらいなものだ。

「彼方はどうして戦うの？」

不意に、澄んだ声が耳朵を打った。作戦中の大人びた声ではなく年相応といった若くかわいらしい声だ。

「……」

彼は無言だった。

彼女が作戦行動中に私的な会話を行うことは極めて異例だった。

過去に一度だけあったのが記憶に残っている。

「どうして彼方は私と共にいるの？」

前回は返す間もなく戦闘に突入してしまったためにうやむやになっってしまった。だが、今回は少しばかりの時間があつた。

「俺の居場所は戦場だ」

抑揚の無い声で彼は言った。

「そう」

短く彼女が答えた。その声音が心なしか寂しそうだ。彼は感じ、
なんとなくこのままではいけない気がして、さらに言葉を紡いだ。
「ティア、君は俺の命を救ってくれた」

思いつく限りの言葉を紡ぎ続ける。

「そして、俺は君に雇われた。君の願いを叶える為に」

そこまで言っただけで彼は後悔というものに行き着いた。

そして――「忘れてくれ」と付け加えて彼は沈黙した。

『任務中の行動記録は取り消せません』

笑いの混じった声で彼女はそう返した。

まだ幼さの残る少女がくすくすと笑っている様子が脳裏に浮かんで、
なんとなく彼は安心した。

『ポイントAへの到着を確認しました。これより補給物資を贈ります』
プレゼント

告げた声はもういつもの大人びた声に戻っていた。

それを残念がるわけでもなく、彼は空を仰いだ。目を細めれば、
頭部のカメラアイが自動的にズームして、遠くを鮮明にする。

空から落ちてくるそれを見つけるのにそれほどの時間は必要とし
なかった。

敵からの奪取及び待ち伏せを懸念して、補給物資は彼が到着して
からというのが通例だった。もしも状況が悪ければ位置を変えるだ
けでいい話だ。

高度が一定に達したところで第一次開傘、一気に減速する。ゆら
ゆらと落ちてくるそれは、地面へと迫ったところで第二次開傘し接
地した。

ロックハンドルを引っ張り上げて右へと回す。圧力の抜ける音と
共に白い煙が噴出した。恐らくは衝撃吸収剤の類だろう。周囲への
警戒を怠らず、彼はコンテナの中身を手に取った。中身はレーザー
ライフルとショットガンだった。

毎度の事ながら彼は中身に驚かされた――とはいえ、彼の表情に
変化があるわけではないが――一体、いつの間に調達しているのだ。

「補給物資を受け取った。これよりポイントBへと移動する」
通信機から帰ってくる『了解』という声を合図に彼はブースターの火を入れた。

機体を滑走させながら彼は戦術マップを開いた。ここから基地までおよそ40キロといったところだ。ブーストを使った移動であれば、ACは時速にして300？程度はある。何の障害も無ければおよそ10分で基地へとたどり着ける計算だ。なにも無ければ。

数分後。

濃密な遠距離攻撃が彼を襲った。

『MT部隊、前面に展開。総数42』

瞬時に分析を終えたシステムが告げ、その情報を彼に齎した。もたら

先ほどの部隊とは違い、重武装のMT部隊だ。ミサイルやグレネードや大型キャノンなどを手当たり次第にばら撒いている。直撃さえしなければ、全てプライマルアーマーによって防げる範囲の火力でこそあるものの、まともに当たれば流石のネクストといえど無傷では済まない。あくまでも——当たればの話だが。

右へ左へ彼はクイックブーストを吹かした。そこに前後の動きを加えてさらに複雑な機動を実現する。

景色が定まらないのは言うまでもないが、瞬間的な機動処理を短時間で行うのはやはり気持ちのいいものではない。たとえるなら、数秒に一回の間隔で交通事故を起こしながら、その物理演算を脳内で行っているようなものだ。

それでも彼は敵機の一機に狙いを定めた。FCSが最適化、右腕のレーザーライフルがセレクトされる。

モニターに『LOCK』という文字が表示され、赤い枠が敵機を囲むと同時に、彼はトリガーを引いた。

ライフルの銃口から光が生まれ、一筋の線を描いた。

爆発。

敵機の一機が一瞬の内に黒ずんだ金属片へと変化して飛び散った。

彼は立て続けに2、3、4発とライフルを発射した。光速で飛来する熱エネルギーの塊を避けられるはずも無く、MTは吹き飛び、爆散し炎を上げて散っていく。そうしている間にも、複雑に機体を動かすのをやめることは無い。

「——ッ」

彼は考えた。こうやって一機一機潰していってもなんら問題は無い。出来るという核心さえある。考えているこの瞬間も、敵を確実に減らしている。

だが、それではあまりに非効率ではないか。もっと簡潔に全てを排除する術があるのだ。

それを使うか否か……瞬間、彼は歯を食いしばった。

機体の背面が光を収束させながら展開していく。そして、収束した光が放たれると同時に、彼の機体は亜音速へと加速した。歪む視界、肉眼では認識できないほどの速度で景色が流れるように移り変わる。噴射時間はほんの数秒であったにもかかわらず、先ほどまで前方にいたMT部隊が今は周囲を取り囲むように位置していた。

オーバー・ブースト

OBと呼ばれるこの機構は圧縮したコジマ粒子を一気に開放することで、前方のみという制約はあるものの、一瞬で機体を亜音速まで加速させるというものだ。

MT部隊の彼らにしてみれば、瞬間移動でもしたかのようなものだ。MT部隊の動きに戸惑いの色が見えている。しかし、考えれば取り囲んでいるのだ。戦術的な優位は彼らにあるといえた。それに気づいてか、彼らの動きもそれに準じたものとなった。

周囲を取り囲むMTに彼はライフルを撃ち続けた。内包されたエネルギーがエンプティになったと同時に、

『プライマルアーマー回復』

待ち望んだ言葉をシステムが告げ、彼は息を吸い込んだ。

肺いっぱい吸い込んだ空気を吐き出す。それに合せて、彼は命じた。

『アサルトアーマー展開』

いつもと変わらない無機質なシステム音声が告げる。しかし、今回は無慈悲な死神の言葉のように思えた。

彼の機体、その周囲が揺らいた。大気が圧縮され、振るえた。その震えがまるで波のように白い大地を砕きながら伝わっていく。波に触れた氷の破片が音もなく塵と化していく様を、呆然と見つめたまま、彼らは――MT部隊は波に飲み込まれた。

「戦闘終了」

彼がそう告げたときには、そこに残されていたもの――いや、残ったものというのが正しい表現だろうか。物言わぬ骸となった残骸が彼の周囲にあった。ボロボロになったそれが、つい先ほどまで機械だったとは到底思えないほど、それは腐蝕していた。風がそれを撫でて、一部がぼろっと地に落ちた。落ちてそれは形を失うように塵へと変わる。

それは『コジマ粒子』と呼ばれる新物質だ。発見者の名を取って命名されたその粒子には、さまざまな特性があった。その中にある、最も強い特性が腐蝕作用だった。その強力さは、金属、非金属問わず有効で、地球上に存在する全てのものを腐蝕させてしまうのではないかとさえ思えるほどの力を持っていた。それを周囲に撒き散らす機構が『アサルトアーマー』だ。これに触れたものは全て、灰燼と化す。

『ネクストの去った後には、ただ死だけが残る』

誰かがその言葉を残したように、ネクストはコジマ粒子を撒き散らす。そこに汚染を残して、去っていく。残るものは瓦礫と残骸と骸、そしてコジマ汚染だけ。そしてそれを日常的に浴び続けている彼や彼のようなリンクスが短命である理由もその1つだろう。

『コジマ粒子再チャージを開始します』

静かなコックピットにシステム音声が反響する。

モニターの脇にはチャージまでの時間とそれをあらわすバーが表

示されている。それを目の端で確認し、彼は用済みとなったライフを放り捨てブースターを吹かした。

「全滅！ 全滅とはどういうことか！？」

基地、その司令室に響いた罵声にオペレーター達が肩をすくめた。

「そ、それが突然交信が途絶えたもので、詳細までは……」

報告に来た男が恐縮した様子で、しきりに頭をかいていた。

「ネクスト……繋かれし者^{リンクス}かつ」

忌々しげに男が吐き捨てる。ダークグリーンのロングコート。その左胸にはいくつもの勲章が輝いている。肩の階級章は大佐を示していた。鍛え上げられた節のあるある体格に、鋭い目つき、口には葉巻を銜え、にらむように戦術マップに視線を落とす。

「ヤツの目的は恐らくここだ」

男が指差したのは、大型の実験施設。それを支えるコジマプラント。男はその破壊が目的だと踏んだ。

「残存部隊を集結させろ、迎え撃つ」

指示を下した男の瞳は自信に満ちていた。

ポイントBで二回目の補給物資を受け取ったあと、彼はオーバーブリストを駆動させた。コジマ粒子のチャージは既に終わっていた。一瞬で亜音速の領域へと加速し、彼はシートに押し付けられる。それでも潰されたりしないあたり、最新式の対Gシステムの恩恵なのか、などと考える余地さえなく、放たれた砲弾のように彼は飛来した。

30キロ程度の距離は亜音速に達した彼にとってさしたる距離ではなかった。

そんな僅かな空のたびをシートに押し付けられるようにして過ごし、彼は作戦ポイントに降り立った。

度重なるGとAMSの負荷によって胃の内容物が逆流しそんな感覚を飲み込んで、彼は前を見据えた。

眼下に見える敵はノーマル、MT、MBT、戦闘ヘリに装甲車と
いったそうそうたる顔ぶれだ。この基地に存在する全戦力がここに
集結しているのではないかと思えるほどの大部隊が展開している。

『作戦目標の破壊を優先してください』

ティアの言葉が耳朶を打ち、彼はイメージする。最も効率的に目
標を破壊する手段を模索する。【LBW WAGM320L】は極
めて強力な兵器だ。しかし、その反面装弾数は1発。今使っても打
ち落とされるのは目に見えている。だとすれば、より確実な状況に
しなければならぬ。補給されたのは突撃銃だ。アサルトライフル右に突撃銃を構え
左にはショットガンが握られている。

答えは1つだった。

いくつもの閃光が瞬いた。

無数の砲撃と銃撃が生んだ閃光。もう1つは彼の生んだ閃光。ク
イックブーストやプライマルアーマーの生み出すコジマ粒子の光だ。
「——ッ！」

口径の大きな砲弾が当たったらしく、プライマルアーマーを突き
抜けた衝撃が彼を襲った。

それ以外にも飛び交う弾丸が度々プライマルアーマーにぶつかり
干渉の光を生んでいる。普段は透明なプライマルアーマーがその姿
を晒し、彼の周りに球体を形成していた。

『プライマルアーマー、70%に減衰』

告げる音声を意識の奥で聞きながら、彼は何機目かも分からない
ノーマルの頭を撃ち抜いた。崩れ落ちるように倒れるそれを盾代わ
りに使いながら、彼は縦横無尽に駆け巡る。時折クイックブースト
を吹かし、緩急をつけながら弾丸の雨の中を駆け抜ける。

警報。

左に頭を向ける。

レーザーブレードが迫る。

バックブースターを噴射。

急減速。

刹那、目の前を横切る光刃。

意識をそれへ、FCSが連動しショットガンをセレクト。

発砲。

空中で分裂した散弾を至近距離で喰らい、一瞬でボロ布のように変わったかと思うと、オレンジ色の花を咲かれるように爆発する。

それを一瞥もせず、背中に受けながら、建物の隙間から現れたMBT《主力戦車》を蹴り飛ばす。二つに分かれて転げる戦車を踏む潰して、敵のノーマル達が近づいてくる。背面のミサイルポットから炎の尾を描く大粒の雨が放たれ、彼へと降り注ぐ。

前方への加速でそれらのことごとくを地面へと誘い、無力化しつつ、右手のライフルを見舞う。

一機、二機と弾丸が穿ち、沈黙させ彼は空中へと躍り出た。

鬱陶しい対空砲に的確に弾丸を打ち込んでいく。驚異的な精度であるが、外せる弾丸など一発とてありはしない。跳んだ拍子に周囲を綿密探査。地形、リアルタイムの部隊配置などいくつかの情報を得る。

警報。

ミサイルが迫る。モニターに移るそのミサイルは比較的小型のタイプのようなのだ。

クイックブースト。

回避を試みる。

「――！」

衝撃が機体を襲う。プライマルアーマーがその炎と破壊の衝撃を受け止めて揺らぐ。

しかし、それだけの破壊の奔流を受けてなおその防護壁が破れることはなかった。

『プライマルアーマー、54%に減衰』

そろそろ限界か。

空気が波を立てて揺らめいた。

『アサルトアーマー展開』

プライマルアーマーが54%のこの状況では効果範囲は大幅に限定される。だが、アサルトアーマー、コジマ粒子には別な特性もある。

ECM《対電子妨害行動》だ。高濃度のコジマ粒子下においては通信やレーダーといった電子機器は全てその用を成さない。そこにいた全ての機器が異常を示し、一瞬、彼を見失った。

彼は【LBW WAGM320L】を起動させる。大型の長方形をしたそれはコンテナのようなシンプルなものだった。

メインブースターを垂直へ。その推力に押されて、機体が空へと舞い上がる。

発射。

コンテナの扉を突き破るように一発の大型ミサイルが姿を現した。ロケットモーターが点火、瞬く間に目標へと飛翔する。しかしそれを最後まで見届けられるほどの余裕は毛ほども存在しない。プライマルアーマーを失ったネクストは極めて脆弱なのだ。言ってみれば合戦の最中に裸になるようなもので、それこそ偶然飛んできた流れ弾でさえ脅威となる。

彼は丁寧な動作で周りの建物の間を縫うように移動する。

着弾。

轟音と共に暴風が吹き荒れた。純粋な破壊の奔流が吹きつけ、なぎ払う。

「目標への攻撃に成功。戦果は不明。これより回収ポイントに向かう」

『了解』

短い会話は終わり、彼は後方へと視線を向けた。

足の遅いMTは無視することにして、比較的に高速なノーマルを優先的に攻撃していく。

警報。

左手のショットガンに被弾。間髪いれずに投棄、予備のハンドガンに持ち替える。弾数が少ない代わりに威力は高いタイプだ。

発砲。

全弾を撃ち尽くして2機のノーマルを葬った。だが、それではない。

ハンドガンを投棄。

あえて懷に飛び込んで、光刃による一閃を見舞う。流れるような動作でさらに3機が両断される。

追いつがるMTとMBTにライフルを発砲。数機を撃破。ライフルの弾が尽きる。

舌打ちして、ライフルも投棄。もう1つのハンドガンに持ち替える。

ステップを踏むようにクイックブーストを吹かし、距離を開けていく。

コジマ粒子のチャージさえ終わればオーバードブースとで一気に振り切れる。それまで耐えればいい。

ノーマルを両断。火花を撒き散らしながら、崩れ落ちる。

断続的な衝撃が彼を襲う。強烈な一発こそ受けていないものの、少なからず被弾してしまっている。今のところ機体への異常はないが、このまま喰らい続けるわけにもいかない。

コジマ粒子のチャージ率は41%といったところだ。

衝撃、至近弾。バズーカ砲を持ったノーマルが数機確認出来る。発砲。

何とか一機を沈黙させる。

ミサイル警報。

チャージ率は43%。

迷っている場合ではなかった。完全に振り切れるかは分からないが、一度距離を開ける必要があった。

光が収束し、背面のブーストユニットが展開。次の瞬間、弾丸のような加速が機体を押した。

『お疲れ様』

ティアの言葉を身に溶かしながら、彼はコックピットの中で息を吐いた。

負担から開放された脳がぼーっとしている。

「ティア、少し疲れた」

眩き、彼は目を閉じる。

『わかったわ。おやすみなさい』

ティアの言葉を遠くで聞くように、彼は眠りへと落ちていった。
プロローグ 終わり

Act 00 プロローグ（後書き）

あとがきです。

ゲームをやっていてふと、小説化を思い立ち書いてみました。細かな設定はわからなかったので、独自に構成していますが、いかがでしたでしょうか？

今回はとにかく戦闘をメインにとにかくアマコア f A の要素を一通り出してみました。ごちゃちゃしててホント申し訳ありません。というか AMS とかゲーム内で説明あった？ っで感じます。コジマ粒子の詳細もよくわからんし、ノーマルとネクストの戦力差もよくわからなかったので、そこら辺はゲームをベースにしています。とりあえずフラジールの中の人が言ってた「光が逆流する」というのと『首輪つき』という言葉とリンクス（Links？）というキーワードから操縦システムを構築しました。もし公式設定とか知ってる方いましたら、ぜひ感想にでも書いて教えてください。

補足ですが、ゲームとのリンクは想定していません。企業名くらいは出てきますが、多分ほかのリンクスもオリジナルになりそうです。もし、少しでもアマコアらしさとか感じていただければ幸いです。

次回……いつになるかわかりませんが、そのときはキャラクターを中心に描きたいと思います。

感想などいただけると泣いて頭をたれます♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0340r/>

AC fA 名も無き物語《ネームレス・エピソード》

2011年2月22日13時10分発行